

アメリカ西部に生きた女性たち

— Women of the West —

吉田 かよ子

Women of the West

Kayoko Yoshida

Abstract

This paper deals with studies on women of the American West. Its objectives are threefold: First, it introduced a new approach to western American history offered by Patricia N. Limerick in her book "The Legacy of Conquest : The Unbroken Past of the American West" published in 1987.

Second, based on her theory which views the West from a multiplicity of points of view, an attempt was made to observe the particular status which women held in the West by looking into the lives of women of various ethnic backgrounds, namely, the white, black, Jewish, Chinese and Japanese women who struggled to survive in the volatile living environment of the American West in the 19th century. Particular attention was given to Native American women in order to highlight the gross injustice done to their people in the name of westward expansion.

Finally, the current problems of the relativistic approach of the Limerick model were briefly examined. The paper concluded that, despite difficulties and limitations, such attempts to see the American West as a "multi-layered scene" contributed a great deal in ameliorating a one-sided interpretation of history and at the same time successfully provided women's studies with an appropriate place in Western history.

Women of the West, History of the American West, Women's Studies

目次

- I. フロンティアの終焉から西部史の幕開けへ
ーパトリシア・リメリックの主張からー
- II. 西部に生きた女性たち
 - 1. 無垢の帝国
 - 2. 「西部の女性たち」
 - 3. 東部から移住したオーバーランダーの白人女性
 - 4. 南部から移住した黒人女性
 - 5. ユダヤ人女性
 - 6. 太平洋を渡った中国人、日本人女性
- III. 個人史に見る先住民インディアン女性
 - 1. パイオニアとインディアンの相克
 - 2. サラ・ウイネムッカの回想録「パイユート族との生活」より
- IV. 結びー西部史の再構築を促す視点から

I. フロンティアの終焉から西部史の幕開けへ

ーパトリシア・リメリックの主張からー

アメリカ史の中心的命題はアメリカ西部の開拓にあり、文明が野蛮と邂逅し、これを征服する場所としての辺境こそが、アメリカおよびアメリカ人の形成に欠くべからざる役割を果たした。ーフレデリック・J・ターナー (Frederick Jackson Turner) の1893年に発表されたこの報告は、その後の西部史研究に決定的な影響を持った。多くの歴史家にとって、ターナー説こそが西部史そのものとなってしまったのである。ターナーが、1890年の国勢調査をもとに、すでにアメリカには辺境は存在しない。従って、アメリカ史の第一期の幕は降ろされたーと結論づけた時をもって、アメリカ西部史は事実上歴史研究の真剣な対象と見なされなくなってしまった。その後続くターナー信奉者は、1893年の彼の説を西部史モデルとして固定化してしまっただけである。

その結果、西部征服はアメリカ史における征服者としてのパイオニア達と、高貴な野蛮人としてのインディアンを類型化したまま、20世紀の複雑な現実世界とは何の関わりもない歴史の一ページとなった。

この西部史研究の停滞を打ち破った歴史学者の一人が、パトリシア・N・リメリック (Patricia Nelson Limerick) である。リメリックは、1987年に出版された「征服の遺産」 (The Legacy of Conquest) の中で、ターナーの白人男性中心主義的視点に挑み、次のように述べる。

Turner was, to put it mildly, ethnocentric and nationalistic. English-speaking white men were the stars of his story; Indians, Hispanics, French Canadians, and Asians were at best supporting actors and at worst invisible. Nearly invisible were women, of all ethnicities.¹¹⁾

中西部に自営農地を求めて西に向かった白人男性を中心にすえたターナーモデルには含

まれない、砂漠や、鉱山や鉄道や、都市に生きたインディアン、ヒスパニックス、フレンチ・カナディアン、アジア人はせいぜい脇役にしかすぎず、悪くすれば、全く無視された存在であった。同様に、無視されているのが、すべての人種における女性達であった。

ターナーモデルに定義されるフロンティアの終焉は、東部から見る西部という固定された一視点からだけ正当化できるものであり、この先入観を捨てて、他の多様な西部史の“俳優達”に目を転じれば、20世紀の歴史に連なる西部像が見えてくる。リメリックの主張する相対主義の視点に立てば、西部史は新たな幕開けを迎えることになるのである。

「征服の遺産」は、ターナーモデルに対抗するリメリックの相対主義的アプローチをきわめて広範囲に論じているが、本論では、その中の女性の役割を焦点をあて、リメリック以外の研究者達の手になる研究成果を紹介しながら、西部に生きた様々な背景の女性達を検証していきたい。

II. 西部に生きた女性たち

1. 無垢の帝国

Exclude women from Western history, and unreality sets in. Restore them, and the Western drama gains a full human cast of characters—

Patricia Nelson Limerick

1970年代になると、ターナー流歴史観が完全に女性を除外したものであるということが、一般に認識されるようになった。リメリックは、西部を無垢の帝国（empire of innocence）と定義する。辺境での新たな出会いを、自分の価値観からしか認知する事ができ

ない宣教師やパイオニア達はまさにイノセントな存在として捉えられている。

西部への移動の主要な動機は、より良き生活と機会であり、他者を傷つけることではなかった。環境破壊や、先住民の圧迫は決して彼らの本意ではなかった。他者の領土に侵入しても、それは犯罪者ではなく、パイオニアの行為とみなされた。結果が常に手段を正当化したのである。土地所有の個人的利害は、領土獲得の国益と合致していたし、それらの利益は、キリスト教文明の領域の拡大という使命とも重なっていた。意図の純粹さ（innocence of intention）は西部開拓というプロセスに明るい光を与えた。しかし、時が経つにつれ、西部に魅せられた人々は、彼らの純粹さゆえに犠牲者の道をたどることになる。

まず、自然が自分たちの期待に沿わなかった時の落胆は、それが鉱山や牧場で働くものであれ、農業に従事するものであれ、大きいものであった。また、プロモーターの言うがままに、特に金やその他の鉱物資源発掘に群がった人々も犠牲者と言えるだろう。

こうした中で、真にその無垢さゆえに痛ましい犠牲を強いられたグループとして、リメリックは白人女性パイオニア達を挙げる。家族や文明の地から引き離され、過酷な労働と孤独に苛まれ、見知らぬ風景の中に自分を見失っていくフロンティアの女性たちこそ、男達の気まぐれな野心の犠牲となった悲劇的存在である、というのだ。

しかし、リメリックはそうした女性たちを無垢の帝国の殉教者に祭り上げることはしない。彼女達の家族への献身の裏には、インディアンやヒスパニックス、モルモン教徒、不道德な男性、娼婦達に対するあからさまな蔑視が存在していたことを見逃さないのである。

リメリックの相対主義的歴史観は、その歴史を構成する個人にも容赦なく当てはめられ

る。真の西部人を、善人と悪人、聖者と罪人、といった区分ではなく、一人一人の人間が、犠牲者的側面と加害者であり悪役であるという側面を持ち合わせる存在として捉えることによって、西部史はより豊かに彩られるはずなのである。次節からは、別の文献に見られる西部の女性達をそれぞれの民族グループに沿って概観していく。

2. 「西部の女性たち」

キャシー・ルチェッティ (Cathy Luchetti) とキャロル・オルウェイ (Carol Olwell) の共著になる「西部の女性たち」(Women of the West) は、前世紀中葉から末にかけて、アメリカ大陸を横断して西部に達した白人や黒人女性、西部先住民インディアンの女性、あるいは太平洋を渡って西部にたどり着いた東洋人の女性達のおびただしい数の写真に縁取られている。

明白な運命というロマンチックな通念のもとに語り継がれた、勇猛なヒーロー達の陰に隠れて、これまでスポットライトを浴びることのなかった女性達の写真である。1900年にはその数800,000人とされる、ミシシッピ以西に住んだ名もない女達は、写真のなかでいずれも挑むような強い意志を示す眼差しをレンズにむけている。人間の居住する環境としては最も厳しい条件下にあったであろう極西部での生活を死守しようとする顔である。

これら800,000人の中には、もの言わぬ少数民族グループの女性達が多数存在したことを忘れてはならない。内訳を見ると、中国人4,500人、日本人370人、黒人12,000人、そしてインディアン6,000人が含まれている。残念なことに、これら少数グループの女性のほとんどは文盲であり、彼女達の文化的背景も、自らの言葉で記録することを奨励するもので

はなかった。彼女達の記した記録があれば、女性にとって、西部での経験はどのようなものであったかの全体像を理解することができたかもしれない。写真の中だけに生きるこれらのもの言わぬ女性たちの記録のないまま、フロンティアの生活史は、19世紀半ばから急速に増加した欧州系アメリカ人のオーバランダー達(大陸横断者)の残した膨大な日誌などの「東部から見た西部」の一方的な記録に頼らざるを得ない。

こうした困難な状況の中で、ルチェッティとオルウェイは世紀末の西部に集まった女たちを(1)東部から移住してきたオーバランダーの白人女性、(2)先住民インディアン、(3)主に南部から来た黒人女性、(4)ユダヤ人女性、(5)太平洋を渡ってきた中国人、日本人女性、のグループに沿って紹介し、フロンティアに生きた女達にとっての西部を相対化する事を試みている。それぞれのグループの女性たちを概観し、特に白人との邂逅の歴史的意味を考えるために、あるインディアン女性の個人史をその回想録の中から紹介したい。

3. 東部から移住したオーバランダーの白人女性

19世紀の西部の記録の多くは、東部から陸路やってきたオーバランダー達が残したものである。男性が書き残したものの多くが調査、トレイルの記述、植物や地質観察の記録、地図、気象情報、インディアンに関する報告、などであるのに対して、女性はより個人的な生活誌を記している場合が多い。見たこともない風景に感嘆し、共に旅を続ける仲間を詳細に描写する女性達は、また日常の衣食について、誕生や死について、書き残している。その一方で、先住民や中国人クーリー、メキシコ人牛使いなど、それまで出会ったことの

ない人々には大きな驚きととまどいを隠そうとしない。

彼女たちの事物の捉え方は、狭隘で頑迷であるとは言うものの、それぞれ異なった厳しい生活環境のもとでのオーバーランダーの女性達の生き様に共通するのは、家族を守り、より良き生活を求めて精一杯生きるたくましさである。しかし、超人的とも思えるこうした努力は、必ずしも相応に報われたわけではなかった。

フロンティア家族史研究の第一人者であるリリアン・シュリッセル (Lillian Schlissel) はペンシルバニアからウイコンシンを経てオレゴンに移住した一家族の記録を通して、フロンティアが女性の必死の努力にもかかわらず、幾多の試練の場であったことを実証しようとしている。⁴²

アビゲイル・マリックは、オレゴンへの移住によって、長女との別れ、二人の息子と夫の死、次女の発狂、三男の出奔、三女の離婚、を経験する。ビクトリア時代の女性らしく、決して本音をもらさないアビゲイルもついに、長女に次のように書き送る。

Coming closer to the truth, Abigail wrote that the frontier was just not a good place to raise children. "I have so Mutch trouble with Children. They are Not like children raised in the States and They have no Father and They Will Not Mind Me." ⁴³

シュリッセルは、他のオーバーランダーの女性達の日誌や当時の記録をもとに、こうした不幸は、フロンティアに生きた女性達すべてにふりかかっていたことを強調する。オーバーランダーの女性の、家族にとってのより良き生活のために、という理想は、シュリッ

セルの言う包囲された理想 (an ideal under siege) であり、彼女達はまさにフロンティアという無垢の帝国 (empire of innocence) の犠牲者だったと言えるだろう。

4. 南部から移住した黒人女性

奴隷制度の枠外にあった北部の黒人達にとっても、白人社会に受け入れられることはきわめて困難であった。西部だけが唯一の機会を与えてくれると信じて、1840年代に多くの黒人が移住を開始し、南北戦争後はその数はさらに増加した。

南北戦争前に西部に自らの選択で移住してきた彼らは、多くの場合、若く独身で、野心に燃えていた。彼らがある程度の成功を収めた様子は次のように記されている。

"... the colored people... possess property to the amount of \$3, 000, 000 in mining claims, water rights, ditch stock and some real estate." They also owned farms, ranches, and business in Marysvill, Grass Valley, Petaluma, and Stockton, California.⁴⁴

しかしすべての黒人が、このように鉱山や水利権、不動産に恵まれるという楽観的な見通しを持てたわけではない。東部からの移住者が増えるに従って、黒人に対する寛容さも失われていった。そうした中、多くの黒人女性もまたフロンティアとその機会に惹かれて西部にやってきた。しかし彼女たちの存在は、当時の限られた職業選択の中に新たな摩擦を生み出した。洗濯女としての地位は、より安い賃金で働く中国人女性にとって代わられ、黒人は家庭の下働きに甘んじることが多くなった。1860年代半ばには、合衆国全体でも職は

限られており、確立した技術も定収入もない黒人女性にとって、状況は厳しかった。

西部に住む自由身分の黒人は、1830年には13,000人にすぎなかったが、1870年には45,000人にふくれあがった。南北戦争後の再建時代に入ると、南部人たちが大挙して西部に流入し、黒人特に女性は再び厳しい偏見にさらされるようになった。富も地位も彼女達には無縁であった。しかし、洗濯女や女中として低賃金で下働きに汗する彼女たちの中にも、中産階級に登りつめた女性たちがいたことに注目したい。

1851年にジョージアから牛車に乗ってロスアンゼルスにやってきたビディ・メイソン(Biddy Mason)は、郡裁判所で自由の身になる証明書を得た後、週給2ドル50セントで看護婦の職につき、その蓄えで市の土地2区画を手にした。その後も次々と土地を入手したビディは、ついには不動産業で財をなす。慈善事業にも熱心なビディは、後には自宅を困難に直面する旅人の避難所として提供したりしている。

アUNT・クレア・ブラウン(Aunt Clare Brown)は、一文無しでコロラドにたどり着いた後、セントラル・シティでシャツ一枚50セントの洗濯屋を始め、1866年には、10,000ドルを蓄えた。彼女はこれをすべて自営の幌馬車隊につき込み、南北戦争後の南部から、安全に黒人たちを西部に移動させる手段を整えた。彼女の幌馬車隊はすべて自由になった元奴隷たちの手で運営されていた。

マミー・プレザント(Mammy Pleasant)は、ジョージアの奴隷から身を起し、ボストンで裕福な黒人と結婚した。夫の死後、サンフランシスコに移り住んだマミーは、50,000ドルを元手に下宿屋を始めた。買い物帰りに電車に乗り込もうとした時、肌のやや白い一人の友人だけが乗車を許され、マミー

ともう一人の肌の色が黒い女性は乗車を拒否された。

マミーは弁護士を雇い、電鉄会社を相手取って訴訟を起こし、少額ではあるが、損害賠償を取りつけることに成功した。これは、女性が起こした黒人差別反対訴訟の先陣を切るものの一つとなった。

この例からもわかるように、比較的肌の色の明るい黒人女性たちは、中産階級の女性のマナーや口調、仕草を身につけ、中には出身を偽ったりしながら人種の壁を越えていこうとするものもいた。しかし、明らかに黒人とわかる人々は、白人社会の陰となって生きて行かざるをえなかった。南部や東部に比較すれば、西部は彼女たちによりよい経済的機会をもたらしたはしたが、なお根強い偏見と差別の二重苦を背負わなければならなかった。

5. ユダヤ人女性

ユダヤ人女性への差別は黒人に対するほど厳しいものではなかったが、それでも彼女たちがフロンティアの生活に慣れることは、アメリカそのものに慣れることと同じくらい困難であった。

1850年には、ポーランドおよびドイツからの移民である8人のユダヤ人がロスアンゼルスに在住していたと記録されている。1851年、サクラメントに200人いたユダヤ人は、10年後には2.5倍に増加した。1860年には西部全体に10,000人のユダヤ人が集まったが、その半分はサンフランシスコに居住していた。

主として宗教上の理由から、都市部に集中して住む傾向の強いユダヤ人は、すぐに商人として頭角を表し、都市富裕層の地位を築いた。こうしたユダヤ人たちの妻は、家庭内の一切を取り仕切る要となった。彼女たちが残した文献も、中産階級の家庭内でドイツ人や

アイルランド人の女中たちを取りしきり、完璧な家庭経営に腐心する様子が記されている。

ユダヤ人社会から一步出ると、ユダヤ人女性は、夫の社会的成功の度合いに応じて社会的認知を受けるようになった。彼女たちは、イスラエル人、ヘブライ人と尊敬をもって迎えられたが、jewという呼び名は、貪欲さや不誠実と同義語に用いられる場合もあった。

しかし、西部という隔離された地域の中では、宗教的相違を越えて女性同士の連帯が強まったことにおいては、ユダヤ人も決して例外ではなかった。フローラ・スピーゲルバーグは、メキシコ人女性の友人への宗教上の便宜を次のように記している。

“I always placed my home at the disposal of my Mexican friends to erect their shrine. In fact, I loaned them draperies and cushions for the priests to kneel upon.”⁶⁵

6. 太平洋を渡ってきた中国人、日本人女性

中国人女性たちは、西部に来た他のグループの女性達とは全くかけ離れた所に存在していた。中国人花嫁を乗せた赤いセダンがチャイナタウンの道路を走り出すと同時に、彼女の行動範囲は、その狭い道路よりさらに狭められていった。

夫が裕福であれば、他の妻や妾たちと競わなくてはならず、また金銭に困った時には自ら200-300ドルとひきかえに奴隷市に身を投じなければならなかった。通常は家の外に一步も出ることを許されず、裁縫仕事で家計を助けるのが妻の仕事とされた。

統計を見てみると、1860年には、33,149人の中国人男性がアメリカに居住していたのに

対し、女性は1,784人、1890年には男性が103,620人と急増した一方で女性は4,522人となっている。

これらの統計に表れる女性の多くは正式に結婚した女性ではなく、中国で売買の対象となった娼婦たちであった。彼女たちは手紙を書くこともなく（少なくともアメリカ国内での通信の跡は残っていない）、日誌を記すこともなく、その境遇をどのように感じていたか知る由もない。

1875年から1916年にかけてマギー・カルバートソン (Maggie Culbertson) やドナルディーナ・キャメロン (Donaldina Cameron) といったプレスビテリアン婦人宣教師たちは、カリフォルニア州サンフランシスコ、サンノゼ、イズルトン、ウォルナットクリークから中国人および日本人娼婦の救出を積極的に試みている。

当時すでに、都市部における中国人排斥感情が高まっていただけに、宣教師たちのこの試みは地元の役人や政治家の妨害を受けるのが常だった。用意周到な彼女たちの計画は、白人のアメリカ人女性が中国人街でも安全であったこともあって、年間30~40人の救出の成果を挙げた。1889年には36名が救い出され、この中には日本人1名も含まれた。宣教師館開設から最初の13年間に200名が助け出されたが、そのうち18人に未成年者の保護状、55件の結婚無効届けが確認されている。その後、中国に帰った女性が多かった中、学生や教師としてアメリカに残るものもいた。また自発的に元の娼婦に戻るものもいた。

なぜ中国人女性たちが、そのような境遇に甘んじたかに明確に答えるのは困難だが、「西部の女性たち」の中では、原因を次のように推測している。中国の農村の出身である彼女たちは、全く異質の文化の中に言葉もわからないまま投げ出された。てん足で歩行が

困難であること、ほとんどの場合教育を受けていないこと、夫に対する忠誠と儒教の呪縛もさらなる足枷となったのではないかと言うものである。

チャナタウンの片隅の窓もない部屋の中で一生を終える女性にとっては望郷の念は常であっただろうが、苦界に生きた女性たちにはそれすら困難であったかもしれない。

1860年の国勢調査では存在しなかったサンフランシスコの日本人女性は1880年には86名、1900年には872名、そして1910年には6,925名と急速に増えていく。中国人排斥気運が高まる中、日本人に対する現地の人々の感情はまだ暖味なものであった。

当時渡米したのは写真花嫁が多かったが、彼女たちには日本の中産階級の子女も多く含まれていた。都市の家庭に育った彼女たちには、西部の荒々しい自然のなかでの生活は決して容易なものではなかった。上陸した港から向かった場所は、カリフォルニアのリビングストンであれワシントン州のヤキマ渓谷であれ、荒涼たる原野に、床も断熱材もないみずばらしい小屋であることが多かった。1880年代に西海岸にやってきた日本人は農耕に適さないような土地を次々と農地へ変っていった。小規模であっても、日本人の農地は馬鈴薯、イチゴ、カリフラワー、豆類などを生産し、その生産性は高いものがあった。女性たちは夫の農業の手助けに、家事に献身した。1909年に野口よねはそうした日常の様子を次のように詩に詠んでいる。

Bits of straw and clay and woman's hair,

So shall be builded my house...⁶⁾

1880年代に、日本人が男女共にアメリカ社

会に好意的に受け入れられたのは、彼らの強い同化の意志によるところが大きい。中国人たちがその服装や髪型ゆえに敵視されることを知る日本人は、日本から花嫁が来るや、すぐさま彼女たちに洋服を着させた。つば広の帽子、高襟のブラウス、ロングスカート、バックル付きのベルト、編み上げ靴、それにブラジャーにヒップパッド—緩やかに体に巻き付ける着物からコルセットで体を締めつける洋服への転換は、彼女達にとって最初の大きなカルチャーショックであったに違いない。

しかし、こうしたアメリカ社会への同化の努力も、時代の日本人排斥の動きには勝てず、1920年、日本政府は対米査証発給を停止するに至った。帰国した女性たちは、旧態依然とした家父長制の枠組みの中に再び取り込まれていかざるをえなかった。アメリカに留まったものたちは偏見に耐え、新たな生活を切り開くが、それも太平洋戦争勃発と共に財産没収、強制収容という一層苛酷な道へと続くだけであった。

Ⅲ. 個人史に見る先住民族インディアン女性

1. パイオニアとインディアンの相克

第2節で述べてきたどのグループより以前に、西部の草原や南西部の渓谷、太平洋岸へと下る丘陵部を自由に生きる、記録に残らない多くのインディアンの女性たちが存在したことを忘れてはならない。自然と共に生きるこの自由を大きく転換させた出来事に、彼女達の同胞が欠かせない存在だったことは、皮肉なことであった。

ルイスとクラークの大陸横断探検隊は、ガイド兼通訳をつとめたショショーネ族の娘サカジャウエアの存在なくして太平洋岸北西部

に達することはなかったと言われる。しかしその後続く白人たちの西部開拓の波に、インディアンは翻弄されていくのである。

移住者の数が増え、土地を求める者がインディアンの領土を侵食するにしたがって、連邦政府は当初のインディアンとの約束を破棄するようになった。土地や権利をめぐるの、白人移住者とインディアンとの争いは、1850年以降急増する。1850年にオーバーランダーのトレイルで殺されたインディアンの数は76人であったのが、1860年代末には426人にのぼる。その後の、アメリカ大陸からインディアンを徐々に抹殺していこうとする拡張主義の歴史についてはここでは言及しないが、これに端を発する白人とインディアンとの相克はきわめて今日的な問題として現代アメリカ社会に厳然と存在する。

パイオニアたちの記録には、インディアン部族内の女性の隷属的立場が繰り返し述べられる。しかし、それは必ずしも正確とは言えない。部族によっては、母系で女性が中心的役割を担っていることもまれではなかった。こうした部族では、女性は白人女性たちよりむしろ独立した存在であったかもしれない。

白人女性たちは多くの場合、土地を所有したり、男性の後見なしに契約を交わすということはありえなかったが、母系インディアンの場合には、結婚に際して女性は自分の財産を有し、決して夫やその縁者に財産が渡ることにはなかった。また部族内でも責任ある地位につき、意思決定に参画したといわれる。出産は大地の恵みを意味し、それゆえに女性は畏敬の対象となった。

インディアンと白人移住者の間の恐怖と誤解の物語は広く流布されたが、一方で両者の間には友情の物語も数多く存在した。オーバーランダーたちの多くはいかにインディアンが彼らを導いて困難なトレイルを乗り切ったか

を語る。ここに紹介するサラ・ウイネムッカ (Sara Winnemucca) の祖父トラッキー酋長も1844年のステーブンス・マーフィー隊のガイドとして活躍し、ネバタの砂漠越えに力を貸した。彼らの多くがその見返りに得たものは、見知らぬ土地にガイドとして強制的に同行させられることであった。

トラッキー酋長の孫娘サラの回想録「パイユート族との生活」(Life Among the Piutes) の抜粋から、インディアンの目から見た白人との悲劇的な出会いをたどってみよう。

2. サラ・ウイネムッカの回想録「パイユート族との生活」より⁷⁾

私は1844年頃に生まれた。最初の白人が私たちの地域に来た時、私はまだ幼かった。彼らはライオン、そう吠えるライオンのようにやってきた。私の生まれた部族は当時ネバタ全域に散在していた。祖父はパイユート族の国全体を治める酋長で、カリフォルニアから東に向かう白人隊がやってくるのが見えたとき、ハンボルト湖畔に野営していた。

知らせを聞いた祖父は、彼らの容貌をたずねた。ひげづらの白人だと聞くと、祖父は躍り上がって手を打ち、大声でさげんだ。

「我が白人の兄弟、待ち望んでいた白人の兄弟がついにやってきた！」

翌年、多くのパイオニアたちがやってきて、ハンボルト湖の近くで野営した。祖父は部族のもの何人かを従えてキャンプを訪れ、全員と握手をした。白人の兄弟達は立ち去るときに、祖父に白い錫の皿をくれた。ピカピカ光っていた。彼らが去った後、祖父は部族全員を集め、白人の兄弟から受け取ったこの美しい贈り物を見せた。私たちの国ではこのようなものを見たこともなかったので、一同満足し

たという。祖父はこのほか気に入って、この皿に穴をあけ、頭の上に乗せ、帽子として被った。白人の姉妹たちがダイヤの指輪やあざらしの毛皮のコートにうっとりするのと同じように、祖父はこれが大のお気に入りだった。

3年目にはもっと多くの移住者がやってきて、その夏フリーモント隊長は、祖父にトラッキー酋長という称号を与えた。川にも祖父にちなんでその名をつけた。トラッキーはインディアンの言葉である。了解とか了承したという意味である。部族の中から12人がフリーモント隊長に同行してカリフォルニアに行った。どのくらいの期間行っていたのかはわからない。

同じ年の秋も深まって、移住者が続々とやってきた。白人の兄弟たちはこの時はじめて私たちと生活を共にした。もう山々（注；シエラネバダ山脈）を越えることができなかったからだ。現在は巨大なカーソンシティが存在する、カーソン川のほとりだった。あなたがたは私たちのことを好戦的と呼ぶ。でも私の部族のものたちはこの白人達を殺したり、馬を盗んだりしなかった。全然そんなことはなかった。

冬の間、部族のものたちは白人を手助けした。必要なだけ、食料を与えた。金を払え。さもないと、食べ物はやらん。などとは決して言わなかった。私たち野蛮人は当時そのような言葉を使うことはなかったのだ。

翌春、祖父が戻ってくる前に、他の部族からの恐ろしい知らせに私たちの間に戦慄が走った。子どもたちに語られたのは、恐ろしい話だった。母親たちによると、白人が（インディアンを）みんな殺して、食べているというのだ。溪谷の方向に砂がまう度に、白人が来たと思った。（中略）

ある朝、白人がやってきたという知らせに

どれほどおびえたことか。みんな懸命に走った。子供たちの面倒をみていた叔母の一人が、私の母に言った。「女の子たちを埋めよう。そうでないとみんな殺されて、食べられてしまう。」母達は、私たちを埋めて、物音を聞いたら決して声をあげてはならない。もし声を出せば白人に殺され食べられてしまう、と言った。母は、わたしといとこを埋め、太陽に焼かれないために顔にセージの葉をかぶせた。一日中、私たちは埋められていた。

祖父が愛してやまなかった人々に見つかり、食べられてしまうかもしれないとずっと考えながら、生き埋めになっている気持ちを想像できるだろうか。夜はやってこないのではないかと思えた頃、ささやき声を聞いた。私たちはじっとしていた。足音が、どんどん近づいてくる。心臓が口から飛び出しそうだった。その時、母の声が聞こえた。「ここよ。」両親に掘り起こされた時の私の気持ちはだれにも想像できないだろう。

山中に隠れている間に、祖父が我らが白人の兄弟たちと呼んだ人々が、部族の冬の備蓄のある場所にやってきた。彼らは全部に火をつけた。冬のために私たちが蓄えたすべてがその夜のうちに燃えてしまった。父と何人かの男が夜の間に少しでも持ち出そうとしたが、できなかった。父たちが到着する前に、すべて焼けてしまったのだ。

彼らが、その秋にやってきた最後の白人たちだった。部族のものたちは冬中この白人の兄弟たちのことを恐ろしげに話した。この白人の隊は（明らかにドナー隊）は（注；シエラネバダ）山中で全滅した。山越えには時期が遅すぎたからだ。⁸ 私たちは、彼らを救うことができたかもしれない。だが、部族のひとびとは彼らを恐れていた。誰もかわからなかったし、どこから来たかも知らなかった。可哀相な人たち。どれほど苦しんだことだろう

う。みんな飢えてしまったのだから。雪があまりにも深かったのだ…（中略）

* * *

サラの祖父、トラッキー酋長が死んだ時、彼の最後の望みは孫たち—3人の女の子と2人の男の子、をノートルダム修道会がサンノゼに開校したミッションスクールに送ることだった。1860年の春、子供達はサンノゼに着いたが、数週間で学校を去ることになった。白人生徒の親からの苦情によるものであった。カリフォルニアのスペイン系の人々は、サンノゼ伝道所の近くに住むインディアンの子供から自分たちの子供を苦勞して引き離していたので、ネバタから5人のインディアンの子供がくると知って抗議したのである。

同年、ピラミッド湖保留地がパイユート族に与えられた。衣類、日用品、農耕機具などが、政府から配給されるという条件だった。サラは、23年間に13人の政府担当官が来たが、最初の年以降、一度として配給があったことはなかった、と記している。

ピラミッド湖とマディー湖に囲まれた保留地での平和も長く続かなかった。1869年に大陸横断鉄道がこの保留地を横断して開通すると、白人は地域の最も良い部分をパイユートから取り上げてしまう。

サラが20歳が過ぎた1865年頃から、パイユートと白人たちの関係は悪化していく。騎兵隊による部族の虐殺やパイユートによる騎兵隊兵士殺害などが相次ぎ、英語の読み書き、会話のできたサラは、部族と騎兵隊や政府担当官の間に入って交渉の仲介をつとめるようになる。その後、サラは連邦部隊の駐屯地で通訳として働くことになる。1875年、オレゴン州の駐屯地にいたサラは、パイユート保留地内に学校を建設する手助けをすることになった。1876年、学校が完成し、インディアン子弟の教育が始まったのもつかの間、ワシントンか

らの指令で、担当官が交代することになった。再びサラの回想に戻ろう。

* * *

1876年6月28日、新任の担当官ラインハルド少佐が着任した。「サラ、おまえの部族のものたちに、ワシントンのビッグ・ファーザーが私をここによこした、と言うのだ。大統領はいかにしておまえたちを良き人々にするかを話された。おまえたちが住むこの土地は政府の土地だ。おまえたちが政府のために喜んで働くつもりなら、政府はおまえたちに仕事を与えよう。そうだ、政府はそれ以上のことをやるのだ。男も女も一日1ドル支払おう…。」

彼が話している間中、私の部族の人々は頭を垂れたままだった。彼の話の間、誰もその顔を見ようとはしなかった。イーガンが立ち上がって、言った。「ファーザー、我々は読むことができない。なにもわからない。ワシントンのビッグ・ファーザーが我々をだますことはしないでほしい。彼はある人間をよこしてあることを約束し、違う人間をよこすと、また違うことを言わせる。あなたの前任者は、この土地は我々のものであり、この地をどう使うかも我々次第だと言った。ところが、あなたがやってきて、この土地は政府のもので我々のものではないと言う。あなたはいい人かもしれない。あなたと同じように我々も金は好きだ。支払う金は多額になる。我々は人数が多いし、働く時は、皆働くからだ。」

そこで担当官が言った。「おまえたちに私になにかするように言う時には、つべこべ言わずに、行って、それをやれ。」

* * *

インディアンたちは一週間働き、給料を取りに行くと、担当官は配給物の費用をインディアンに負担させ、労働の代価としての賃金の支払いを拒否した。インディアン達は怒った。政府は配給物を無料で提供しているのを知っ

ていたからである。

1878年、パイユート族の一部が、バノック族の蜂起に加担しているとの疑惑が持たれた。サラは、政府軍隊に対する事情説明に懸命になる。結局蜂起そのものには関わっていなかったパイユートはワシントン準州ヤキマのキャンプ送りとなった。

凍てつく冬の雪中をヤキマにむけて老人、女たち、子供、障害を持つものたちが行進する様はサラにとって悪夢となった。多くのものが道中に倒れたが、ヤキマにたどり着いたものを待っていたのは、燃料も食料もない家畜小屋での暮らしだった。その後、パイユート達は小麦を育てて生きるが、常に先住の保留地インディアンから土地を守って暮らさなければならなかった。

サラは政府の通訳として働き続けるが、最低賃金に甘んじなくてはならなかった。1880年、ついにサラは内務長官カール・シュルツに面会する。シュルツはサラに多くを約束するが、何一つ守られなかった。パイユートたちは、政府の度重なる裏切りをサラのせいにすることもあった。1882年、サラはホブキンスと言う名の白人と結婚するが、パイユートのために正義を主張し続けた。

1884年、議会はパイユートの土地を認める法律を制定するが、それは施行されることはなかった。サラはネバタのラブロックにインディアンの学校を作ったが、1891年にモンタナで彼女が死亡する前に閉校になった。

IV. 結び—西部史の再構築を促す視点から

1987年に出版されたリメリックの「征服の遺産」は、アメリカ西部の過去を複数の視点から再構築するための新たな西部史モデルを提供するものであった。本論では、リメリッ

クの相対主義的歴史観を、西進運動と共に合衆国に組み込まれていく西部という地域に生きた様々な民族グループの女性たちの生き方を紹介する事によって、その理解の一端を捉えようと試みた。

インディアン女性サラ・ウイネムッカの回想録の一部を紹介した以外は概論にとどめたが、開拓のプロセスとしての西部ではなく、生きる場所としての西部はどのグループの女性にとっても、困難きわまりない場所であったことが理解されよう。

オーバーランダーの女性たちは、残された多くの記録から、それまでのロマンチックに理想化された存在とはほど遠い苦難に満ちた生活の連続であったことが明らかになった。西進運動とは反対に、太平洋の西から東をめざしてやってきた中国人や日本人女性には、言語や文化的差異に人種偏見が相まって、苛酷な試練と生活の場であった。黒人女性も、西部にあっても19世紀の人種のヒエラルキーの犠牲者であり続けた。同じ白人種であっても、ユダヤ人女性も宗教上の偏見や色濃いヨーロッパ的価値観から自由になることはなかった。そしてインディアン女性たちを襲った自分たちの土地からの追放と流浪の歴史はようやく彼女たちの口を通して語られるようになったばかりである。

彼女たちに共通するのは、displacement—自分達の文化的基盤から根こそぎにされることを経験したことである。日本人はさらに太平洋戦争勃発による強制収容で、ようやく住み慣れた西部の各地から荒涼たる原野の収容所に追いやられると言う二重の displacement を強いられた。

「征服の遺産」から5年後の1992年、リメリックは *Journal of American History* に興味深い記事を寄稿している。「征服の遺産」での複合的視点の導入という主張は、言うは

易く、行うは難いものであることを率直に告白しているのである。特に、中国人、日本人の残した文献を自ら読むことのできないことにいらだちを隠さない。しかし、こうした困難や自身の主張の再考のプロセスの中からこそ西部史の新しい姿が見えてくることを確信して次のように論文を締めくくっている。

In 1992, we can no longer think of the United State as "a world without ghosts." The landscapes of North America are heavily invested with human memories, and the tangle of those memories provided both common and contested ground for the people of various origins whose descendants now populate this nation. This "multi-layered scene" is what the American landscape now presents for our exploration. That enterprise requires historians to enage in a constant process of disorientation and reorientation, taking part in the pleasures, the discomforts, and the conflicts of discovery.⁹⁾

アメリカ西部史における女性研究は、端緒についたばかりである。西部を過去、現在、未来に直線的に見るのではなく、様々な人間の重層的記憶の中に再構築しようとするリメリックの主張は、そうした女性研究に歴史の正当な場を与えるものだろう。そしてリメリックの言うように、さまざまな発見の喜び、不満、対立に参加しながら、常に迷い、方向を正しながら、新しい重層的な西部像が形成されていくことになるのだろう。

Notes

- (1) Limerick, Patricia, N., (1987) *The Legacy of Conquest, The Unbroken Past of the American West*, W. W. Norton Co., New York, p. 21.
- (2) cf. 吉田かよ子、アメリカ西部開拓史に埋もれた女性たちの実像を求めて、1992、北星短大紀要第28号
- (3) Schlissel, Lilian, et. al (ed.), (1988), *Western Women, Their Land, Their Lives*, 1-354, Univ. of New Mexico Press, Albuquerque, New Mexico, p. 85.
- (4) Luchetti, Cathy & Olwell, Carol, (1982) *Women of the West*, 1st ed., 1-240, Orion Books, New York, p. 43.
- (5) *Ibid.*, p. 49.
- (6) *Ibid.*, p. 57.
- (7) *Ibid.*, pp. 103-111.
- (8) cf. 大森 実、カリフォルニアを奪れ、リードの開拓魂、(1986), 1-314, 講談社、リード・ドナー隊は、1846年に西部を目指した幌馬車隊だが、同年10月28日雪中のシエラネバタ山脈の、奇しくもトラッキー酋長の名をとったトラッキー湖畔で遭難した。翌年2月18日第一次ボランティア救援隊が湖畔に到着。リード夫人ら、ドナー隊の17名が救助された。
- (9) Limerick, Patricia, N., (1992) *Disorientation and Reorientation: The American Landscape Discovered from the West*, *The Journal of American History*, Vol. 79, No. 3, December 1992, p.1049.